2020 年度文学部英米文学専攻ガイダンス

「ピアノ 1 台分の本」

松田隆美
（英米文学専攻教授・慶應義塾ミュージアム・コモンズ機構長、中世イギリス文学）

巽孝之先生は、義塾で英米文学専攻を選ぶ特別な意味についてお話しになるなかで、西脇順三郎を紹介されました。何度もノーベル文学賞候補となり、20 世紀を代表する詩人で文学研究者の西脇順三郎その人に、私は会ったことはありません。私が大学院生のときに亡くなられたので、芝の増上寺での葬儀の裏方として、会葬者の車を誘導する手伝いをさせていただいたのが唯一の接点です。しかし、西脇の詩は、よくわからないながらも学生時代から読んでいましたし、私が大学院で教わった安東伸介先生は西脇順三郎の直弟子で、いろいろと思い出を話してくださいました。その中で印象に残っていることは、安東先生ご自身も文章に書かれていることですが、西脇順三郎の専攻ガイダンスでの発言です。

西脇順三郎は、「英文科に入って、英語が出来るようになりたいなどと言うのはだめだ、出来る学生が入ってくるのが英文科です」、「音楽学校に諸君が入ったと思い給え。ピアノ 1 台くらいは買うだろう。さしあたって君達は、ピアノ 1 台分、本を買い給え」とだけ言うと、すっと帰ってしまったというのです（『ミメーシスの詩学－安東伸介著述集』慶応義塾大学出版会、2013 年、pp.18-19）。三田に進級してきて、いきなりそんなことをぶっきらぼうに言われたら学生は面食らうでしょう。西脇がどういうつもりでそういう発言をしたのかはわかりません。何か深淵な意図があったのかもしれませんし、単に機嫌が悪かっただけかもしれません。いずれにしても、専攻の大先輩がガイダンスという公的な場でした発言ですし、私は西脇順三郎と同じ中世文学の研究者として先達の発言に多少の責任も感じますので、私なりに註解を加えてみたいと思います。

前者の発言は、専攻で学ぶ心構えについてと解釈することができます。英米文学専攻に来たのだから、もう君たちが考えるべきは、自分はどのくらい英語ができるか（あるいは、できないか）ではなくて、英語をどれくらい読んで使うかだということです。もし皆さんが、テストではそれなりの点がとれるのに英語ができるようになった実感がこれまでなかったならば、その原因は英語をとくに必要としていなかったからかもしれません。人間は必要にせまられないとなかなか上達しないのですが、どうせ必要にせまられるならば、授業で単位を落としそうだとか、取引先が外資系だとかの消極的理由ではなくて、楽しい理由でせまられたいものです。ダンテを原書でどうしても読みたかった Blake は、いきなり『神曲』を教科書代わりにしてイタリア語を勉強しましたし、Coleridge は地中海へ向かう船の上でイタリア語の文法を独習しました。（ちなみに二人

ともロマン派の詩人です。秋になったら「英文学史Ⅱ」で出てきます。）自分勝手な理由に突き動かされて語学を学ぶときは、こうした「乱暴な」学習法でも案外挫折しないものです。皆さんは英米文学専攻に進学することで、自ら英語を必要とする環境を選んだわけですから、ぜひそれを楽しい動機としてください。

後者の発言については、ピアノ 1 台が一体いくらするのかを考える必要はありません。（西脇も気にしていなかったようですし、私も知りません。）ポイントは、自分が読める以上の冊数の本を手元に置きなさいということだと思ってください。実際西脇順三郎は「買い給え」とは言っても、「読み給え」とは言っていません。専攻の同僚の先生方は全員、一生かけて読める以上の本（や漫画）を自宅にお持ちですし、それらに埋もれてというか、それを部屋に敷き詰めてその上に布団を敷いて寝るような生活しています（もちろん比喩です、念のため）。大学の文系のまともな研究者というのは、たいてい皆そうです。もちろん読めれば読むにこしたことはないですが、本の存在を知っていること、読もうと思えばそこにあることがとても重要なのです。現在はたいていの本は電子版でも読めますが、私は、少なくとも自分の蔵書のコアとなる本については、昔ながらの紙の本として購入することをお勧めします。書物は、テキストである以前にひとつの「もの」ですし、中世から言われているように人間の記憶とは空間的で立体的なもので、手を伸ばして本のページに触れることで活性化し、読書の楽しみも内容の理解も増すものです。

義塾の英米文学専攻の基礎を築いた西脇順三郎の言葉を借りて、私からのメッセージとさせていただきました。（2020/4/12）